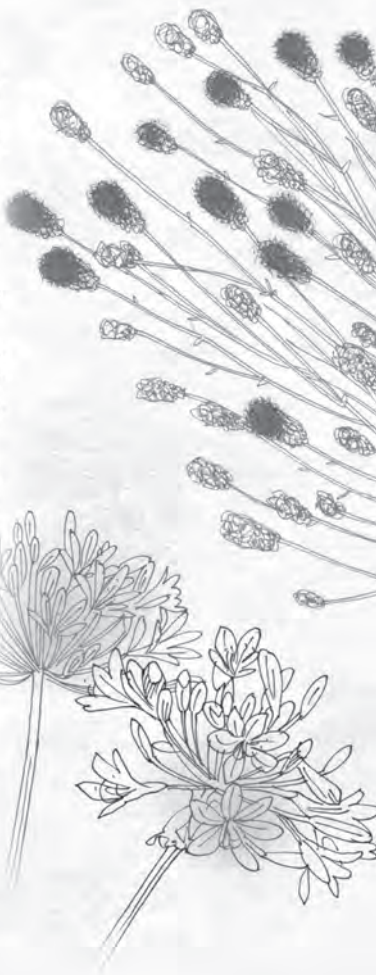


わたしの人生、何色？

朝倉久子



目次

インコの想い出	5
わたしの幼ものがたり	14
本郷曙町界限	23
帰り道	36
真夜中の訪問者	51
猫	57
抱擁	62
西郷隆盛の詩	64

川口の母が亡くなって……………	66
支離滅裂……………	69
朝まだき（私の二・二六事件）……………	71
室生寺にて……………	74
中部山岳国立公園 上高地・白骨温泉道中記……………	83
特別寄稿	
室生寺の石段と朝倉さん……………	118
あとがきに代えて……………	
生きて感じて書くという証明……………	121
松島 義一……………	
峯崎ひさみ……………	



インコの思い出

お前は、ブルーの色をしていた。

白いベレー帽を被ったようなおでこが、なんとも愛くるしかった。

朝ごはんを食べていると、

「タベタ、タベタ」

と、言っ、ご飯粒をねだったね。

庭から、はこべやつじの花を取って来てやると、ちゃんと蜜のところを知って、上手に食べたっけね。

お前の声を、カセットテープに収めたら、二日目に、お前は狂っちゃった。どこかにライバルがいると思ったのだろう。

手と言わず、耳と言わず、食いついて放さないんだもの、痛かったよ。お前は私の手にぶらさがったまま、籠に入れられたんだ。

可哀想だから、カセットをかけるのもう止めにした。お前の小さな心を掻きみだしてごめんよ。お前のお喋りがあんまり上手なので、よその人にも聞かせてあげようと、思っただけなの。

「三番センタークロマティ、四番サード原、背番号8、五番ファースト中畑、キャッチャー山倉。ピッチャー山倉」

遂には、ピッチャー山下になってしまったね。テレビから聞えてくる竹下さんと、ごっちゃになってしまったのね。不思議とピッチャー江川が言えなかった。

ピーコは本当に頭が良かった。おぼえようと積極的だったものね。

「昔々あるところに、お爺さんとお婆さんがおりました」

と、私が手の甲を口許へもってゆくと、すぐに飛んで来て、私の唇へおでこを押して来て来たものね。柔らかい生毛の下の血管が、ジンジン音たてて流れているのが伝わって来たよ。

桃太郎さんのお囁が大好きだったね。草臥れて、私が喋るのを止めると、もっとやってくれ！ と、言わんばかりに、唇を、そっと引っぱるのだった。

「オジイサントオバアサンガ、ヤマヘシバカリニユキマシタ」

なんて、つめてしまうから、私が訂正を加えると、今度は喋らなくなってしまふ。

「オバアサンガ、カワデセンタクヲシテイルト、カラカラカラ……」

あれ？ 今度は私が反省をする。

「川上から、大きな桃がどんぶらこ」

教える私の方が、正確に発音しなくてはならないことをあらためて知らされる。

一回で覚えることもあった。

「寂しさに」

私が思わずくちずさんだ歌の文句を、即座に「サビシサニ」と来た。

そうだ、百人一首を覚えさせよう。短いし覚え易い。私は調子にのって、

「寂しさにー、宿をー立ち出でて眺むればー、いづこもおなじー、秋の夕ぐれ——」

と、抑揚をつけて幾度も歌って聞かせた。ピーコは、いつものようにオデコを押しつけて来て、一生懸命聞いていたが、急に私の唇に食いついた。

「イタイ」

『そんな変なふし、できないよ』

と、お前は人間にものを言ったのだね。

今でも、お前の呼ぶ、私とピーコの暗号が聞えて来るような気がする。

どこかにいたら、教えておくれ、それが駄目なら、どなたかにたんと可愛がつてもらいなさい。万一、鳥達の仲間に入ったのなら、お前の本来の啼き声にもどって、仲間はずれにされないよう、お前は頭がいいから、きつと順応してゆけると思うよ。

無事を祈ってます。

「ピーコちゃん、解りましたか」

逃げたインコへ Ⅱ

去年、お前が散らした薄むらさきの薔薇の花が、今年も綺麗に咲いたよ。

ピーコ、お前が逃げて行ってしまっただけから、もう、一年にもなろうとしている。

この薔薇の花が、お前との別れのモチーフになろうとは（思いもよらなかった）。

私は大事に、この薔薇の苗木を育てていたから、たおやかな枝の先に、小さな蕾を見つけると、嬉しくて毎日ながめていた。蕾は日に日に膨らんで行って、やがて赤味を及びた花弁のかたまりが、薄紫に変化してゆく頃、はなびらの端が、めくられるように開きはじめる。狭いベランダは、芳潤な香りに包まれて、ひとしきり、都会の喧噪の中にあることさえ、忘れさせてくれた。

この鉢をテレビの横に持って行ったら、と思いつつも、その楽しみはしまっ

おくことにした。

最初の花も、二輪めの花も終つて、最後の薄紫の薔薇の花が、咲き終ろうとする頃、私はその鉢を部屋の中へそつと持つて入つた。案の定、お前はすぐに飛んで来て、花の上に、ふわり、と止つた。

見ていると、お前は盛んに花芯のあたりを突いていたが、お前が動く度に、盛りを過ぎた薔薇の花は、一ひら、二ひら、その華麗な形姿をくずして行つた。鉢の罫りに円を描くように、花卉はすっかり散つてしまつた。

そして、悪戯つ子のように、私の肩に飛び移つて来たお前は、
「ピピッー！」

と、一声高く啼いた。

また、花芯だけになつた薔薇の木に飛んで行つて、まるで子供が玩具とたわむれるように、いつまでも遊んでいた。

いつかも、茶道の先生のところから頂いて来たご自慢の菊を、万古の壺にさして